

ヒステリシス非線形タンジエンシャルモデルの数式解説 (tangential_model_hysteretic_nonlinear.h)

Open DEM Japan

2025年6月29日

本モデルは粒子間接触における接線（タンジエンシャル）相互作用を履歴依存かつ非線形に取り扱う。主な特徴は

- 剪断変位ベクトルの履歴保持により静止～滑り遷移と履歴ループを再現
- 正味重なり δ_n がゼロに戻る際に剪断基準をリセットする塑性（ヒステリシス）機構
- ねじり（トーション）を任意に組み込み、結合摩擦限界を適用
- オプションで弾性ポテンシャルや散逸エネルギーを計算し熱発生へ反映

以下、実装アルゴリズムを教科書形式で数式化し、式には通し番号を付す。

接触法線単位ベクトルを \hat{n} 、相対接線速度を \mathbf{v}_{tr} 、履歴剪断変位を ξ 、法線方向重なりを δ_n 、前回圧縮ゼロ時点の重なりを δ_0 とする。

まず剪断履歴の時間積分

$$\xi(t + \Delta t) = \xi(t) + \mathbf{v}_{tr}\Delta t - [(\xi(t) + \mathbf{v}_{tr}\Delta t) \cdot \hat{n}] \hat{n}, \quad (1)$$

により常に接触面内へ射影される。

剪断長さ

$$\xi = \|\xi\|. \quad (2)$$

■塑性（ヒステリシス）処理 法線重なりが完全開放 $\delta_n \leq \delta_0$ となれば現在の剪断状態を塑性基準として保存し

$$\xi_0 \leftarrow \xi, \quad \xi_0 \leftarrow \xi. \quad (3)$$

以降の弾性剪断は

$$\tilde{\xi} = \xi - \xi_0, \quad \tilde{\xi} = \xi - \xi_0. \quad (4)$$

■接線ばね力 線形ばね仮定

$$\mathbf{F}_t^{\text{spring}} = -k_t \tilde{\xi}, \quad (5)$$

ここで k_t は接線ばね定数。

■クーロン限界 材料摩擦係数 μ を用いて

$$F_t^{\text{max}} = \mu |F_n|, \quad (6)$$

ただし F_n は法線弾性力である。

■滑り判定と力の決定 ばね力の大きさ $F_t^{\text{spring}} = k_t \tilde{\xi}$ が式 (6) を超えるか否かで場合分けを行う。

(A) 静止摩擦 $F_t^{\text{spring}} \leq F_t^{\text{max}}$ のとき

$$\mathbf{F}_t = \mathbf{F}_t^{\text{spring}} - \gamma_t \mathbf{v}_{\text{tr}}, \quad (7)$$

ここで γ_t は接線減衰係数。

(B) 滑り摩擦 $F_t^{\text{spring}} > F_t^{\text{max}}$ のとき、剪断変位を縮小して

$$\tilde{\xi} \leftarrow \tilde{\xi} \frac{F_t^{\text{max}}}{k_t \tilde{\xi}}, \quad (8)$$

$$\mathbf{F}_t = -F_t^{\text{max}} \frac{\tilde{\xi}}{\xi}. \quad (9)$$

■トーシオン (ねじり) オプション `torsion` を有効にすると相対角速度 $\omega_n = \hat{\mathbf{n}} \cdot \boldsymbol{\omega}_{\text{rel}}$ を時間積分して角変位

$$\psi(t + \Delta t) = \psi(t) + \omega_n \Delta t \quad (10)$$

を得る。接触円の有効半径 R_c (球では半径 R と重なりから算出) を用い

$$T_n^{\text{spring}} = -k_t R_c^2 \psi, \quad (11)$$

$$T_n^{\text{max}} = F_t^{\text{max}} R_c. \quad (12)$$

$|T_n^{\text{spring}}| > T_n^{\text{max}}$ の場合は

$$T_n^{\text{spring}} \leftarrow T_n^{\text{max}} \text{sgn}(T_n^{\text{spring}}), \quad \psi \leftarrow -\frac{T_n^{\text{spring}}}{k_t R_c^2}. \quad (13)$$

ダッシュポット減衰を組み込む場合は $T_n^{\text{spring}} - \gamma_t R_c^2 \omega_n$ を加える。

■トルク 球形粒子半径 R_i, R_j の典型例では

$$\begin{aligned} \boldsymbol{\tau}_i &= -R_i \hat{\mathbf{n}} \times \mathbf{F}_t + T_n^{\text{spring}} \hat{\mathbf{n}}, \\ \boldsymbol{\tau}_j &= -R_j \hat{\mathbf{n}} \times (-\mathbf{F}_t) - T_n^{\text{spring}} \hat{\mathbf{n}}. \end{aligned} \quad (14)$$

非球形粒子は接触点 \mathbf{x}_c と重心との差 $\mathbf{r}_{i,j}$ を用い $\boldsymbol{\tau}_{i,j} = \mathbf{r}_{i,j} \times (\pm \mathbf{F}_t)$ を採用し、ねじり項は同様に加算する。

■散逸パワー (熱発生) 式 (7) のダッシュポットと式 (8) に伴うスリップ縮小による散逸を

$$P_{\text{vis}} = \gamma_t \mathbf{v}_{\text{tr}} \cdot \mathbf{v}_{\text{tr}}, \quad (15)$$

$$P_{\text{slip}} = \frac{(k_t \tilde{\xi} - F_t^{\text{max}})(k_t \tilde{\xi} + F_t^{\text{max}})}{k_t \Delta t}, \quad (16)$$

と計算し、`heating_tangential_history` が `on` のときこれらを占有粒子または壁要素の発熱源へ加算する。

■まとめ 式 (1) – (16) が `tangential_model_hysteretic_nonlinear.h` に実装されたアルゴリズムの数理的全容である。剪断履歴ベクトルの再基準化 (式 (3) – (4)) により荷重反転時の履歴ループを自然に形成し、非線形ばね-摩擦模型は実粒子のヒステリシス挙動を模倣する。さらにねじり摩擦を同一枠組みで扱い、エネルギー収支や熱生成の評価も可能にしている。